慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 希臘羅馬史論, 鈴木錠之助譯 |
| Sub Title | |
| Author | 松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1923 |
| Jtitle | 史学 Vol.2, No.4 (1923. 11) ,p.129(593)- 130(594) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19231100-0129 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 書評

## 希臘羅馬史論（鈴木錠之助譯　國民圖書株式會社發行）

四方の海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさはぐらんといふ明治天皇の御製を拜誦するにつけても、吾々は現時の國際關係に甚しい不滿を感ずる。世界大戰によつて直接間接の戰禍を被れる國々が、戰後も依然として敵對狀態にあることは、人間の我執の如何につよきかを示すところの悲しむべき事實である。而して國際間の多くの不幸は、個人間におけると同じく、實にこの我執から生ずる相互の誤解に基くのである。それ故この不幸を避けるためには、相互の誤解を一掃せねばならぬ。そのためには相互に十分の理解をもたねばならぬ。それにはおのづから歷史研究を必要とする。吾々は外國史及び世界史の研究によつて對者を十分に理解し、世界の大勢に通ずるとともに、また吾々自身の地位と使命とを自覺する。自他の理解が終に相互の融和と協力とにみちびくことを確信する。泰西名著歷史叢書の發刊は、實にかゝる結果にいたらんことをその目的の一部として有するのである。而してその叢書第一卷として、鈴木錠之助氏譯にかゝるフュステル・ド・クウランジュの『希臘羅馬史論』（古代市邦論）があらはれた。

所謂西洋文明は、キリスト敎文明とギリシヤ文明とをその二大要素となすと言つても過言ではない。從つてギリシヤ文明の世界史上に及ぼしたる影響は實にはかるべからざるものである。その政治制度において、社會生活において、學問において、藝術において、實にほとんどあらゆる方面にかいて、ギリシヤは著しい發展をなし、燦然たる光輝を古代史上に放ち、今なほその光輝は消滅しない。從つて西洋文明を理解するためには、當然その淵源たるギリシヤに遡らねばならぬ。ギリシヤの天地において吾々はあらゆる方面における人間の努力の尊き結果―文明の至寶をもつことができる。そこにおいてソクラテス、プラトー、アリストテレスの哲學をきくことができる。フイヂアス、プラクシテレスの彫刻を見ることができる。エウリピデスの悲劇に泣き、アリストフアネスの喜劇に笑ふことができる。しからばかゝる文明を發達せしめたギリシヤは如何なる社會組を織有したか？ソロン、ペリクレス、デモステネスを生んだギリシヤは如何なる政治制度を有したか？またギリシヤ文明を繼承して、政治、法制、軍事、土木、建築の上に特色ある文明を發達せしめたローマはどうであつたか？本書は實にこの問題に答ふる世界的名著として不朽の名聲を有するのである。

本書は、古代民族の信仰、家族、都市、革命、都市制度の消滅の五篇から成る。而して本書の特色を一言にして言へば、古代社會における宗敎の勢力を强調せる點にある。當時の信仰と法律と

を比較すれば、希臘羅馬の家族を組織して居た原始的宗教は、又婚姻制度並びに父權を確立し、親族關係を定め、而して財產權及び相續權をも規定したることが解るのである。此の同じ宗教は漸次家族を擴大したる後、更に一つの大なる社會卽ち都市を形成し而して家族を支配したと同樣にその都市をも支配した。故に古代人の凡ての私法も、凡ての制度も皆宗教より由來したのであつた。都市は全然宗教を基とせる主義、規則、習慣、統治を奉じた。然し乍ら、時を經るに從つて此の古代宗教は、或は變化し、或は消滅したが、それと共に私法及び政權も變化した。斯くて後世革命の相亞いで到るや、社會的變革は步調を同じくして、知識の開發に伴ふやうになつたのである。』かゝる見地の下に、まづ原始宗教の靈魂觀と死生觀とを檢して、死者崇拜と聖火崇拜とが家族宗教の根本要素なることを明かにし、ついでその宗教を基とせる家族と都市との組織及びその發展を叙じ、その都市においては第一次革命によつて政教二權が國王を去つて貴族階級にうつり、第二次革命によつて、從來强國に組織結合され、强大なる權力を有した古代の宗教的家族がその努力を喪失し、また被護民が解族され第三次革命によつて庶民が都市に入り、終に民主主義の勝利となつたことをのべ、最後にこの都市制度が、新しき信仰とローマの征服事業とによつて消滅したことをのべてゐる。

かくのごとく本書は宗教をもつて社會萬般の原動力となし、その影響を强調せるが故に、他の原動力、例へば經濟的方面のごときを看過せるうらみを感ずるけれども、しかし古代社會において宗教が絶大の勢力を有したのは事實である。近時偏狹なる物質的史觀が努力を振はんとしつゝあるに對し、あくまで人間の精神力の偉大を唱導せる本書は、まことの史觀構成に對して正しき指導をなすものと言ふべきである。從つて本書の出現は、必ずやわが思想界に一大反響のあることを信じて疑はない。譯文は流麗にして精緻、裝釘は典雅にして堅牢、內容外觀ともにこの名著の邦譯として、吾々は最大の讃辭をさゝぐるに躊躇しない。つゝしんで譯者に滿腔の敬意を表す。

（松本芳夫）

## 系圖綱要（太田亮著　磯部甲陽堂發行）

さきに日本古代氏族制度並に姓氏家系辭書を著はされた太田亮氏は又系圖綱要を著はされた。本書は其の序の中に記るさる如く『一方に於いて姓氏家系辭書の姉妹篇たると共に、他方に於ては國史研究者の坐右に供したいと云ふ目的から生れたのであるから中央政權に關係ある氏のみに限られて居る』のである。其の記す處は神代御系圖・天皇御系圖・皇族御系圖・諸氏系圖の四系圖で、最後に附錄として簡單なる國史年表を添へて居る。

我國は古來より家の系圖を尊ぶ美風ある爲め、種々雜多の系圖並に其れに類するものが多く傳はり、剩さへ僞作も亦至つて多くそれ故に、この系圖の研究仲々容易なるもので無いのであるが、又仲々興味ある研究である。本書は多年氏族制度並に諸般系圖に就